

ONE PIECE 母は強し

ジエ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ONE PIECEの改変ストーリー。

原作で語られていないルフィの実母がいたら？のifです。

血筋的には相当凄すご都合主義です。

少ない話数で終わらせる予定です。

※短編で終わらせる予定でしたが少し続きそうなので一先ず連載に変更しました。

あくまでイメージ。

作者の画力の無さに絶望しないでくれ。

ルフィ母のイメージ

目次

第7話	6話	5話	4	3話	2	1
35	26	22	18	14	7	1

気がつけば私は船の上にいた。荒波にまみれ、海の生物を相手に同じく海の頂点を目指す海賊を相手にしながら兄であるゴール・D・ロジャーの船員として船の上で闘っていた。

親はいない。当然だ。兄の話では親は両親共に薬物中毒でそれに嫌気が差した兄が20歳の頃に産まれたばかりの私を連れて海に出たらしいからだ。つまり私と兄は20歳離れた兄妹である。随分とおさかなな両親である。

ちなみにその時の両親は廃人寸前だったため兄は私を連れて海へ出たそうだ。

兄は強かった。赤子だった私に記憶はないが、私を胸に抱きながら次々と海賊や力自慢の猛者を制圧し配下に加えていった。これは副船長のレイリーから聞いた話だが私が物心つくまで常に腕に抱いていたらしい。

私にはとあるの力があつた。

キリキリの能力。自分が認識したものをありとあらゆる物を切り裂く力。

どうやら兄は私に与える食料として悪魔の実をすりつぶして与えていたらしい。

後から聞けば「いやー、そんなときは生きるのに必死でおめえーに極力食いもん与えてたんだがそれが悪魔の実とは思ってなかった!」と来たもんだ。つまり私は離乳食として悪魔の実を食べてたらしい。

ちなみに悪魔の実とは超上の能力を人に与える果実であり、一口口にすれば能力を得る反面海に嫌われる、つまり海では何の力も発揮できないどころか泳ぐ力さえ失われる。つまりカナヅチになる。海賊としては致命的であるが、まあそれなりの力はあると自負している。

ともかく船長の兄を支えながら数年がたつ。少ない女船員と仲良くしながら野蛮で気の良い野郎共と航海を楽しむ日々。充実していた。海軍との闘いはあったものの、他の海賊を蹂躪していくものの、目的は変わらなかつた。最果てだ。海の最後。最終目的地で兄はそれを見た。

そして海賊団。最強の海賊団は解散した。

兄は愛すべき人を見つけた。団員はちりじりになった。

そして兄は処刑された。海賊王として笑つて。

兄を捕らえたのは海軍の英雄ガープ。幾度も私達と戦を繰り広げ戦い抜いた戦友だ。

海賊と海軍の間ではあつたがそこには友情があつた。事実兄は自身の妻子をガープに、実妹の私ではなく敵であつたはずのガープに任せた。

まあ仕方ない。この時私はとある男に出会い恋に落ちていた。

荒くれものである私を受け入れ、処刑される海賊王の元クルーでその妹。それを受け入れるなど正気の沙汰ではない。それがその海賊王を捕らえた英雄の息子とあらばなおのことだろう。

私達は立場の関係上離れて過ぎた。長い月日を重ねて、そして子供が産まれた。

彼、ドラゴンは世界の在り方に疑問を感じ革命軍を設立した。私も彼に賛同したが彼から「ルフィと共に健やかにすごしてくれ。俺の道は険しい。お前とこの子には、せめてやさしい時を。俺のささやかな願いだ」そう言われては何も言えなかつた。おかしな話だ。世界を混沌とさせた海賊王の妹にこんな事を言えるとは。流石は我が夫だと思ふ。

数年がたち私達はゆつくりとした日々を過ごす。

息子のルフィは元気に育ち、誰に似たのか大分ヤンチャだ。まあ時々会いにくるガープの影響もあるだろう。私が鍛えてはいるもののガープが来たときは私が貸す訓練の比ではないほどボロボロになつてよく泣きついてきた。そのおかげで私はよくガープと殺し合

いになった。

「私の息子になにしてんだくそ爺！」

「わしの孫じゃー！強い海兵にするための修行じゃ！」

「だからって3歳の子供を谷に落とすなよ!?私の子じゃなけりや死んでるぞ！」

「んむ? エースは無事じゃったんだが……死にかけてたが」

「この爺! 兄さんの子供に何してやがる!」

この時、改めて兄の、そしてその妻の忘れ形見エースを引き取る事を決めた。エースを探しだし保護したガープには感謝するがこの義父はメチャクチャすぎる。夫があそこまで強くなり政府に疑問を持つのはこのくそ爺の影響があったのは間違いないと思う。

さらに数年。息子たちがグレた。

エースは前々から、と言うか引き取った時から私に反発的だったがルフィはとある海賊に出会ってからかなり変わった。

まずその海賊が問題だった。いや、比較的良識的で私の後輩にあたる人物ではあったが。

「姐さん! 何故ここに!」

「よおシャンクス。久々だね」

「母ちゃん知り合い?」

「ああ、昔のツレだよ」

たまたまた夕食作るのが面倒になりルフィとエースを連れて町の酒屋、友人のマキノが営む店に出向いたところ昔馴染みの、兄の元クルーに出くわしてからだろう。

「母ちゃんって!? 姐さん子供がいたんすか?」

「おう。今や子育ての真っ最中だぜ。兄さんの子もな」

「!! 船長の!」

「おい、エース。挨拶しろ。お前の親父をよく知る、お前を認めてくれる人だぞ」

「!?!」

この時エースは不安定だった。誰もが海賊王ゴールド・ロジャーを

否定していたから。いくら私が、ルフィが親愛を注ごうともあくまでそれは親類の愛情。他人から認められない親に対してエースは父親に憎しみすら持つていたからだ。

「まあそうだよな。俺達は勿論船長も立派な悪人だ。それもあの人は世界最大の悪人海賊王だ。だが俺はそれを誇りに思う。あの人は誰にも成し遂げない偉業を成し遂げた偉人だ！誇りをもて！お前は誰より誇り高い人の血を継いだ子で、その妹に育てられてるんだぞ？まったく羨ましい！俺もそんな親父と義母に恵まれたかったぜ！」

エースは困惑しただろう。何せこの時まで私はあくまでガープの息子の嫁としか認識されていなかった。だからエースの叔母であると知らなかった。教えてもいなかった。

「おふくろ、なんで」

「シャンクス。余計なこと言うなよ。兄さん事は知られるのはエースのことは勿論ルフィの事もまずいんだよ。まあエースは父親の事は知ってるけど。あのくそ爺のせいで」

「わ、わりい」

「あ、マキノ！今のしいーな？」

「ふふ、このフーシャ村では知らない人のほうが少ないから安心して。貴女の事はおかげでこの村は平和なのだし気にしないで」

「はは、助かる」

ちなみにこの後妙にシャンクスになつたルフィとエースはちよこちよこシャンクス及びクルー達に付きまどつていた。

これ幸いに私は子供達をシャンクスに預け近場の海を荒らす海賊共を片付け賞金稼ぎ紛いな事をしていた。そして後悔をした。

私が数日離れてる間にルフィは悪魔の実をシャンクスの私物から食べてしまった。それはまだよかった。

問題は私がない間を見計らつた山賊が村を襲い、無事撃退出来たもののシャンクスは方腕を失った。

経緯はシャンクス達が酒場で楽しんでいるところを山賊がそこに絡む。シャンクスは穏便に済ませようとするが海賊に多大な期待を寄せていたルフィとエースがそれらに反発し、二人は海に投げ込まれ

た。

ルフィは泳げなくなったためエースが必死に助けようとするが流石に鍛えていても子供の体力ではどうしようもなく、息をするために浮かぶので精一杯。そこに近海の主が、海に住む巨大な海獣、海王類が現れた。

その時山賊の棟梁は海王類に食われたようだがそれでは足りない主はルフィとエースに食いかかり、シャンクスに助けられた。

「シャンクス！ありがとうございます！本当にありがとうございます！子供達を助けてくれて！そしてすまない」

「姐さん。泣くなよ。こいつらは新時代の鍵だ。片腕くらい惜しくねえ」

「それでもだ！こいつらが私の宝であると同時にお前だって俺の大切な弟分で、兄さんの意思を継ぐ忘れ形見だ！」

「はっ！嬉しい事を言ってくれませ。じゃあ俺もその言葉に答えなきやな！おいルフィ！」

「ぐすつ、え？」

「お前にはこれをくれてやる」

「むぎ、わら帽子？」

「おう。俺のお気に入りだ。つまり俺の魂が籠ってる。大切にしろよ？そしてエース」

「くつ。なんだよ。お、俺は助けてなんて」

「はっ、強がりな所は船長そっくりだ。そんなお前にはこれだ」

「ナイフ？」

「ああ、俺が船長から頂いた大切なナイフだ。俺の誇りだ！」

「俺は腕を失った！だが代わりに守れたものがある！それはお前らだ！そして俺の意思を、誇りをお前らに託す！……………強くなれよ？」

泣いた。皆が泣いた。

不甲斐ない己を。強い意思を持つ男に。守られた己たちを。あま



りに美しく気高いその男に村人も船員も、そして私も。

「まったく良い男だよ。お前は。旦那に会ってなければ惚れてたさ」

「は。光栄だよ姐さん。まっ、片腕なくても俺は強いから安心しな」強くシャンクスを抱き締めながら言う。本当に良い男だ。こいつだってまだ若いだろうに。だがこいつは腕が片方ないくらいでどうこうする輩でないのは私がよく知っている。

だから

「あんたが守った命。粗末にはさせない。誰より強い男に育てるよ。シャンクス、あんたよりもね」

「そりゃー怖い。俺はもつと強くならなけりや行けねえな。それも船長並みにね」

「安心しな。少なくとも私より強い男にしてやる」

「……は、はは。姐さんより、か。俺大丈夫か？」

「ガープ倒せば問題ないよ。っーかアイツ殺してきてくんない？ 爺馬鹿すぎてウザいんだけど」

「勘弁してくれ」

そんなこんなで息子たちは強くなると山籠りを始め家に帰って来なくなつた。

正にグレた。

息子たちがグレたと思ったたら山猿になっていた。と言うか一匹増えてた。そして何故か女山賊ダダンのところで厄介になっていた件について。

少し母親として自信を無くしそうになった。

「すまないねダダン」

「まったくだよ本当に！この糞餓鬼共があんたやガーブの関係者じゃなけりや海に放り込んでるさ！」

「そんな事したらためえらの四肢を切断して海王類の餌にすんどババア！」

「だからやってねえだろ！」

ダダンともこの村に来てからの馴染みで程よい付き合いをさせてもらっていた。お互い好き勝手言い合える悪友の様なものだが、まあそう悪い仲ではない。

息子たち山猿共はしばらくダダンの所にいるようなので物資の援助をしながら時々顔合わせと修行をさせていたある日の事だ。

夫から近々この村の近くを通ると連絡がきた。今は少し離れた島にいるので中間地点で落ち合おうとの事だ。

私は歓喜した。息子たちは愛しているし今は穏やかな日々を遅れなくて幸せだと思う。しかし隣には夫がいないのはやはり寂しい。

その夫から連絡がきたのだ。行かないわけがない。

私は急ぎ準備を済ませ、村の村長、友人のマキノ、そして現在息子たちが世話になってるダダンに挨拶をして少しの間任せることをお願いした。村は比較的安全だし山はダダンの縄張りであるので大丈夫だとおもったからだ。

そして私は再び後悔をする。私は全く学ばない糞馬鹿だって事を改めて思い知らされた。子供達を放任し過ぎていた。縛るつもりも辞めさせる事もしないが、せめて何をしているかは把握しておけば良かった。

どうやら子供達は荒くれ共から金品を盗んだり、この国のゴミ棄て場、ありとあらゆる物を、人を棄てる場所で発掘等をしており其なりに金を溜め込んでいたらしい。そして少し有名な海賊に手を出してしまった。

なんやかんやで無事生き残りはして喜んだ。流石は私の子供達だと。そして同時に悔やまれる。私は母親失格だと。

私があの子達をしていることを把握していればいくら夫に会うためでも島を離れはしなかった。そもそも海賊をこの島に寄せ付ける前に壊滅させた。

仮に海賊が上陸していようが私がいればどうともなかったし

「サボ！しつかりしなさい！まだあんたはいきてんだから！あんたが死ねばルフィが、エースが泣くわよ！」

「酷い怪我だ！早く船医を呼べ！くそ、これがこの世界のやり方か！こんな、こんな事を政府は認めると言うのか！」

気がついたら増えていたルフィの兄貴分でエースの相棒。私にとっては新しく出来た息子の様な存在が世界貴族の乗る船から放たれた砲弾に直撃し、瀕死の重症を負わなかっただろう。

サボはもともとこの島の貴族の息子だった。高等な教育を受ける毎日に嫌気がさし家出をし、海に憧れ、息子たちと義兄弟の盃を交わし、ルフィ達と交戦した海賊たちによって連れ戻された。

そして再び逃げ出し、1人一足先に小船で旅立とうとして海に出たところ、たまたま入国予定だった世界貴族の乗る船に出くわし、何故か撃たれた。

私がいれば海賊など壊滅させた。例えばサボが連れ戻されても簡単に連れ戻してやれた。何からでも守ってやれた！世界貴族が相手でも、世界を、政府を敵に回しても守った！それを！

「……………あんた」

「ああ、行つてこい」

「止めないの？」

「止めても無駄だろう。それに俺も頭に来た。こんな人を人と思わぬ所業、許せる筈がない。後始末は任せろ。全て革命軍のやったことにする」

「頼むよ」

「任せろ」

我慢の限界だった。我慢に我慢を重ねて生きてきた。元々お尋ね者の私が生きていくには我慢が必要だからだ。

ある程度は我慢できたのだ。風船の様に膨らんでいても息抜きをすれば、空気を抜いてやればそれは萎んでいく。時間の経過が落ち着かせる。だが急激な怒りは、ましてや息子の様に思う子にこんなことされれば我慢など、風船など一気に振り切り破裂する！

だから

私は

「塵一つ残さず消えろ」

出国した世界貴族の乗る船をこの世界より跡形もなく切り刻んだ。

その後サボはどうなったか分からない。夫は直ぐに旅立つてしまったから。しかしあの傷だ。意識不明の出血多量。無事ではすまないだろう。だから私は事実をそのまま伝えた。なんで島から離れていたのかも、全てを

「なんで！母ちゃんがいればサボは！」

「やめろルファイ！」

ルファイ殴られた。そしてそれを羽交い締めにして止めるエース。二人は泣いていた。きつと私も泣いているだろう。

少し前までへなちよこなパンチしか出来なかったのに今は痛かった。……心が酷く痛い。

泣いている二人を抱き締めてやりたいのにそんな資格が私にあるのかと自問自答してしまう。抱き締められたのにそんな資格はないと自己否定してしまう。

ダダンが泣いていた。山賊達も泣いている。マキノも村長もみんなみんな泣いていた。

悪餓鬼だった。人に迷惑もかけた。それでもあの子は皆に愛されていた。そんなあの子は私が島を離れていたばかりに

「八つ当たりしてんじゃねえ！悲しいのはお前だけじゃねえ！おふくろだつて泣いてんだぞ！」

「で、でも母ちゃんすげー強くて。じいちゃんにだつて負けないくらい」

「だから辛いんだよ！そんなくらい分かれよ！俺達の母さんだろ！」

駄目だった。気がつけば膝をついて両手で顔を覆っていた。マキノが慌てた様に私に駆け寄るがエースは言い足りないと言わんばかりに叫ぶ。

「おふくろがサボを見殺しにしたと思つてんのか!?んなわけねえだろ！おふくろが旦那に会いてえと思つてそんなにおかしいのか!?俺達の母さんはそんなに人間じゃねえ奴なのか？ちげえだろ！どんなに強くても、どんなに化け物みたいな奴でもおふくろは人間なんだよ！見てて分かんなかったのかよ！おふくろはサボの事も俺達みたい  
に大好きだつたんだよ！そんなくらいわかつて

「エース、もうやめて。私が悪いんだ。夫に会いたかったんだ。好きだから、愛しているからたまにしか会えないから少しでも長く一緒にいたくて」

ボロボロと涙が止まらない。手のひらから溢れた涙は床に水溜まりを作り初めそれは少しずつ広がりを見せる。

「あんたたちに自慢したかった。私の夫はこんなに凄いんだぞって。夫に自慢したかった。私達の子供はこんなに強く育ったって。私の甥はこんなに立派になってるって！新しい子はこんなにも賢い子なんだって！みんなみんな私の自慢な子供なんだって!!」

静かだった。私だけが独り言の様に叫んでいた。

暴れていたルフィとも、それを止めていたエースもみんなみんな静かだった。どんな顔をしているか、それも顔を両手で覆っている私には分からない。

「あの糞共は消したのに、心が晴れない。世界貴族も、護衛の海軍達も全員塵にしたのに心が全く晴れねえ！心にポツカリ穴が空いたみたいに虚しいよ！ねえ！何でサボがあんな目にあうんだよ！あの子は確かに悪餓鬼だったけど良い子だ！優しい子だ！なのに！………サボお。ごめんよ、私が、私が」

ある意味で私にとっては初めての喪失だった。

仲間を失ったことはある。兄だって失った。でも皆自分の中の夢を追いかけて、夢を叶えて逝った。夢半ばでもそれを全力で追いかけていた。

でもあの子は違う。夢に踏み出そうとして踏みにじられた。それが私にとってはずらい。

私は彼等に守られていた。あの子は私が守らなきゃいけなかった！それが、それが！

「うわあああー！があぢやんごべんだざいいいいー！」

とん、と軽い衝撃はルフィのものだった。エースを振り切って私に

駆け寄って、抱き締めてくれた。

「お、おで、ザボがないの嫌で！があ、ぢゃんのぜいにじて、母ちゃんのごどすぎなのに、殴って、！があぢゃん悪ぐねえのにおで最悪だ！」

「ルフィー！ごめんね、ごめんね」

「おで、づよぐなるがら！なんでもぶつどばせるぐらいづよぐなる！母ちゃん泣かせるやづもみんなぶつどばしでやるから、泣かないでよ、母ちゃん！」

「つ！！ありがとう、ごめんね、ありがとう、ごめんね」

強く抱き締め返した。思えば久々かもしれない。長くこの子を抱き締めてあげてなかったと思える。ほんの数ヶ月の事なのに数年の様に感じる。

そしてふと背後から暖かい温もりを感じた。

「ありがとう、おふくろ。親父の事はまだ許せねえけどあんたは俺の自慢の母親だ。俺達を愛してくれてありがとう」

声で分かる。エースだ。あのひねくれた餓鬼が私を抱いている。優しく暖かく。

「俺も強くなるよ。おふくろを泣かせない様に。俺達は死なない。それにサボだって死んでない。あんたの自慢の夫が匿ったんだろ？なら生きてるはずだ！だからいずれ海で再会するんだ！兄弟なんだ、いつか出会っておふくろに会わせてやる！そのためにもルフィー！」

「お、う、う！」

「俺達は誰にも負けない男になる！」

「お、う、う！」

まったく本当に大した子達だ。本当に自慢の子供達だよ。

だから私も覚悟を決めよう。可愛い子供達と随分甘やかしてきた。「……………分かったよ。あんたたち」

一度強く胸に二人を抱く。二人の香りをかぎ、記憶に残す。そして順々にその額にキスをして

「明日から本格的に強くしてやる。そこらの山賊も、海賊も、近海の主も、グランドラインに蔓延る猛者共にも負けない強さをこの私、海

賊王ゴール・D・ロジャーの妹にしてロジャー海賊団で2番隊長、2つ名を殲滅姫ゴール・D・アデル、現在をモンキー・D・アデルが鍛えてやる！覚悟しな！」

泣き顔のまま笑ってやった。



### 3話

最近酷く暇だ。

何せ義息のエースが旅立ち、直子のルフィも最近旅立った。その際ルフィは近海の主を殴り飛ばしていたので強くなったと思いつつも主を回収して村でまつりを行ったのは良い想い出だ。

そんなこんなで子育てに一段落ついた私は今では村の守護者的な立場にある。大切なサボを追い詰めた貴族のいる国は知ったことではないのでフーシャ村限定ではあるが良くしてくれる村人やその周囲の山を縄張りに行っているダダンとは良い関係を築いていた。

思えば長く険しい道のりだった。

心を鬼にして息子たちを鍛えた。野山のなまっちよろい環境で強くなるなど優しすぎて直ぐに家に帰って連れ戻し鍛え続けた。あのガープが顔を青くして止めに入るほどだから余程だったのであろう。

しかし子供達はその修行を乗り越えて旅立った。そしたらやることがなくなりたまに現れる海賊を狩っていたら村の守護者的な立場になっていた。

そもそも私自身賞金首な事を忘れているこの村の住人は些か神経が図太い気がするが。

ともあれそんな事もあり私の今の住まいは港の灯台の中腹に特別に作られた一室にある。勿論ルフィやエースと過ごした家はキッチンと残っているが、彼らが旅立ったあの家は私には広すぎる。

それに私の見聞色の覇気で見渡すにはこの灯台は最適な位置にあるため基本的に私はここで寝食をしていた。

ちなみに嬉しい事のニュースがエースとルフィがいたときにあった。

サボが生きていた。

記憶を失ってはいたがあの子が生きていたことはルフィとエースに強い活力を与え、いつか海で再会しておもいださせると強く誓っていた。エースのあの宣言のままになりはしたのだがエースとルフィ

は嬉しさに涙を流し改めてその思いを新たにしていた。

彼等には内緒だが私は時々夫に会いながらサボにも会ったが私の事は忘れていた。少し寂しくもあったが生きてくれていたことに本当に喜んだものだ。

夫の側近の1人がオカマだったのが許せなくて全力でボコボコにしたが。

「アデルー。またこんなところで日向ぼっこして肌に悪いわよ？それに泳げないのにそんな格好して、染みになつてもしらないわよ？」

日課の日光浴をしていると声がかかった。声の主は今や親友のマキノだ。同年代とは思えないその若々しきは嫉妬すらおぼえる。と言うかこいつは何故未だに未婚なのだろうか？世間の男の見る目の無さに失望する。今度シャンクスでも紹介しようか。

「うるせえな。歳と共に小言多くなつてゑぞ？いい加減結婚して子供作れよ。この若作り！」

「よく言うわよ。子供1人産んで、その子も今や旅立ったのに何でそんなに若々しいのよ？嫌味なの？嫌味なのね？このおっぱいお化け！」

「はっ！そこらの娘っ子にはまだ負けないよ！旦那に愛されるための努力はしてるからね！っーかあんたもそんなに代わんないだろ？」

「二回り大きい癖に！でも言葉遣いは一段とおばさん臭くなつてるけどね。ダダンさんみたいよ？」

「ま、まじか？」

「マジよ」

日光浴は私の趣味だ。

照りつける太陽の日を全身で受け止める。風を感じ、周囲の気配を読むのは暇潰しに丁度良い。中途半端な日焼けは格好悪いので水着で港にビーチ様の椅子に寝転ぶのが常日頃の私のスタイルだ。

そんな私に声をかけるのはマキノくらいで、マキノとのこの言い合いはよくあることだ。ダダンみたいと言われた事は少々シヨックだが、最近自覚がなくもないためそこまで落ち込みはしない。これも歳

だろう。

「んで用はなんだ？この辺りは平穩よ」

「……あまり喜んではいけないけどルフィが賞金首になったわ」

「どんくらい？何やったの？」

「三千万ベリー。ノコリギのアーロンを下したらみたいよ？」

ほう！ほうほう！あのアーロンを潰したか！

「嬉しそうね？」

「そりゃあ嬉しいよ！息子が政府から三千万ベリーの賞金首になるくらいには驚異とみられてる!!流石」

「私と息子の子供だと言うつもりか？アデル？わしの孫でもあるんじゃないがな」

ふいに私とマキノ以外の声が混じる。その声の主はよく知る人物で

「貴様に教育を任せたわしが馬鹿じゃった！エースもルフィも何故海賊にしおった！この不良娘が！」

「ああ!?子供の成長を見守るのが親だろ！つかてめえに育てられた記憶なんぞねえよ！ふぎけた理想を私に押し付けんな！」

「うがぁー！わしの孫が最強の海兵になる夢を妨げおつて！」

「知るか！そんなんなら始めからてめえが育てろ！」

モンキー・D・ガープ。海軍の英雄が突如現れた。神出鬼没なこの爺、私に文句しか言わない。夫が避けるのも無理はないだろう。

「え？なにそれ！わし、最初に言ったじゃろ!?わしが育てるって！そのわしを半殺しにしたのは貴様じゃ！この糞嫁が！」

「はあ!?母親から子供取り上げようとする爺を血祭りにあげて何が悪い！」

唐突に現れたガープはルフィが海賊になったことで文句を言いに来たようだ。

「お前がそんなんだからわしが育てると言ったんじゃ！それなのにエースまで困いこみよって！」

「だったらそもそもてめえが始めから海軍で育てれば良かっただろ

！私を殺して！出来ないから今なんだけどな！ざまあ爺!!」

「よし殺そう！この50越えた若作りババめが！」

「その喧嘩買った。死ねよ海軍の老害」

この後私とガープはひたすらに殴り会う。なれているのかマキノは互いにダウンした私達の看病をしてくれた。

頼むから誰か彼女を娶ってやれ。

ここしばらく世界がきな臭い。

ルフィの活躍が目覚ましく、この最弱の海と言われるイーストブルーにもたびたび聞こえてくる程だ。まあ所詮ルーキーの域をでない程度だが相手が悪い。小物をいくら相手をして弱くても弱くても苛めにしかないし。

だがそれとは別にたくさんの情報も入る。四皇がどうか七武海が何やら、海軍や天竜人がまたもやなどは日常茶飯事ではあるが、昔の知人からあまりよろしくない事を耳にした。ちなみにシャンクスの事で遊びにきたシャンクス海賊団の連中を宴に誘い、さりげなくシャンクスとマキノを二人つきりにさせたところ両者とも満更でもなさそう。帰り際に

「たのむからマキノもらってやれ。だが泣かせたら殺す」  
と言ったら

「っ！やっぱり姐さんの差し金か！」  
と珍しく焦っていて顔を赤らめていた事から少なからず意識しているようだ。

さらにちなみにはあるが私がしたのは単純で、シャンクスの子供は見たくないか？マキノの作る飯を常に食いたくないか？と幹部連中に囁いただけだ。それだけで皆が私の案にノリノリだ。特に後者は。

そんななかやることはやったのかシャンクスはマキノにまた近いうちに来ることを約束していた。

余談だが宴のさいにダダンの所の山賊団を誘ったところ、失礼だがダダンに惚れた男が赤髪海賊団を抜けてダダンを娶る事になった。あまりに驚愕の事実全員が絶叫をあげた後に祝福をした。まさかマキノより先にダダンに春が訪れるとは思わなかったが人が結ばれるのは良いことだ。さらに言えば幹部では無いが、賞金首であり1億ベリー程の猛者であることから私に次ぐ戦力となるのでこの島の安全は守られるだろう。

まあこのフーシャ村とダダンが住む山以外は守るつもりはないと言っているが、反対する奴もいないので問題ない。

そんなこんながあつたが私はシャンクスから得た情報を元に現在四皇のひとりで最強のひとりでもある白髭と立ち会っていた。

白髭。エドワード・ニューゲート。

白髭海賊団の船長であり私の兄と長くしのぎを削った好敵手。現在では最も海賊王に近い男だ。

勿論私も面識はあるし幾度となく殺しあつた仲ではあるが、兄が死に互いに落ち着いたので

「グララララ！ 久しいな妹！ 何しにきた！ また呑み比べか？」

「それは後ですけど今日は別件だよ爺。つーか私はゴール・D・ロジャーの妹であつててめえの妹じゃねえよ！」

今や互いに過去を知る良き飲み友達でもある。子育てやら何やらで戦線を引いたのもその理由の1つだ。何せ出産祝いでこの白髭爺は島を1つ寄越そうとしたぐらいだし、それなりに気に入られてるようである。気に食わないとすれば兄の妹であつた事から妹と呼ばれる事だ。何度海賊王の妹であつて2番手の白髭の妹じゃないと言っても妹呼ばわりは変わらないが。

「それで妹。お前は何しに来たんだ？ 呑み比べじゃねえんだろ？」

「わかつてきていてんなら殺すぞ爺。エースの事だよ」

私がわざわざ白髭の元に来たのは他でもない息子のエースの事だ。

「シャンクスから聞いたよ。あの子はいま仲間殺しの、隊長格を殺した男を追っているって」

「……………ああ、間違いねえ」

「それはあんたが命令したの？ それともあの子の意思？」

「俺の命令だ」

即答。つまりは

「あの子の独断ね」

「……………わかってんなら聞くんじゃねえよ」

この男はある意味で嘘をつけない。その上でなかまを、家族を守るためなら平気で悪役になる。それが答えだ。

「あんたの事は兄の次には知ってるつもり。そしてエースのことは誰より知ってるつもり。……………あの子はあんたの元で幸せなのね？」

「さあな。だがあいつが俺を親父と呼ぶ限り俺の息子だ。子供を守るのは親の務めだろ？」

「ふふっ。違うだね」

この事が分かっただけで良かった。

もしエースが嫌々白髭に従っていたなら。

もし無理やり裏切り者の討伐を行っていたなら。

もし……………。

「良かったわね。エースから嫌われてたらあんた、今頃木っ端微塵よ？」

「洒落にならねえ洒落言ってるじゃねえよ！過保護過ぎんだろ!？」

「あら、子を守るのは親の務めでしょ？ならその障害はできる限り取り除くわよ。まあ私が直々に鍛えたんだしそこらの将校には負けないだろうけど」

もしあの子の人生を妨げるならその存在の一切を悉く葬る覚悟だ。

例えばそれが海賊王であろうと。現在最強の海賊団だろうと。世界政府や海軍、その他もろもろ細切れにしてやろう。過保護だと言われようが今の私の最後の宝を誰にも奪わせはしない。Dの意思は失わせはしない。

絶対に。

「それにしてもお前本当にロジャーの妹か？初めて見たときから見た目変わってないぞ？今何歳だ？」

「は？今？55だけど？」

「詐欺だろ！どう見ても20代だ！悪魔の実際の副作用か!？」

「努力の成果だよ！悪魔の実際の能力で老化って認識は切り刻みだけど、徐々に小皺増えて悩んでんだよ！」

「…………お前、俺が言えた程じゃねえけど大概反則だな。お前ほど敵にしたくねえ奴はこの世に存在しねえよ」

「若い奴には負けないよ！それはそうと今エースはどのあたりか知ってる？」

「…………はあ。色々言いてえ事はあるが教えてやる。エースは今アラバスタに向かっている。定時報告ではここまでだが間違いなく王都に向かっているだろう。俺が現状知るのはここまでだがこれで良いか？」

「サンキュー♪久々に息子に会いにいけるわ！あ、後良いこと教えてあげる。武装色を常に纏えば若さ維持できるわよ！」

「それをもっと早く知りたかったぜ！この妖怪若作り！」



## 5話

俺はある男を探している。

俺達が敬愛する親父。白髭海賊団の船長の率いる隊長の1人を殺し逃げた男、マーシャル・D・ティーチを始末するため。

足取りをつかんだ俺は砂の国アラバスタに向かい、予想外の再開を果たした。

「おっ・エースじゃん！久しぶり！元気してた？飯食ってた？手は洗ってた？ハンカチは………つて半裸じゃん!?風呂は？つかそんなヘンテコサーフボードで海渡んなし！そしてそのボードからでる火は何!?!」

このやかましい女は俺の義母だ。

俺の実父であるゴール・D・ロジャーの妹で義弟であると思っていたが実は従兄弟であるルフィの母親であったりする。つまり俺の叔母であるが、まあ育ての親、なのかもしれない。

それと言うのもこの糞義母には殺されかけた記憶がほとんどなかった。

ある日まではあくまで最低限の生活に関わる事しかしてこなかった。それこそガープの糞爺が俺をボコボコしても手当てはしたくればしたが深くは関わって来なかった。

だがしかしだ。俺がある一件。俺を含めルフィや、そして幼少期の仲間で今は行方不明の仲間で兄弟のサボの件から以上の迄に過保護になり、そして鬼になった。

先ず徹底的に家事をしつけられた。掃除選択料理はそこらの主婦には負けないし、サバイバルな知識も植え付けられたので無人島で一生過ごせるレベルだ。

次に戦闘技術。

正直俺は実父の妹と言うだけで舐めていた。所詮女であると。だがその認識は直ぐに崩れ去った。

俺より強いのは分かっていたが、まさかガープを圧倒するとは思わなかった。

ガープは強すぎる。

弟のルフィを鍛えると言い度々来たと思えば俺も巻き込み崖から突き落とし、ボコボコにされれば風船を大量に巻き付け空を飛ばし、組手と言って俺らに拳骨を叩き込む。俺とルフィはガープがくる度に満身創痍になった。

今からすればそれが修行になっていたと思うが、当時は憎しみしかなかっただろう。おかげで鍛えられたと思うがガープはかなり手を抜いていた。何故なら本気の、と言うより海賊を滅殺するときガープは家程の砲丸を拳で大砲より凄まじい速度で叩き込む。近接戦闘ではその拳で敵を叩きのめす。故につけられた二つ名が拳骨のガープ。

海軍の英雄、拳骨のガープである。

そんな糞爺を義母。って言うのもだるいから”お袋”でいいか。お袋は圧殺した。

圧殺といっても殺した訳ではない。

糞爺の全てを無効化した後言ったのだ。

「あんた強いけど私よりは弱いからこの子達任せないよ。残念でした、強い海兵にしたいみたいだけど私の子供が胡散臭い海兵になるわけないでしょ！悔しかったら私よりは強くなれよ糞爺！つーか海軍ってだけで敵だよ敵！精々悔しがってハンカチでも噛んでな！ばーかばーか!!」

その時の糞爺の表情は滑稽だった。ルフィと一緒に腹を抱えて笑ったのを覚えている。何せ本当に糞爺はハンカチを啜えて

「覚えてろ！絶対エースとルフィは海兵にするからな!!」

と言って逃げて行ったのだから。

この時俺はある意味安堵した。海兵にならなくてすむと思ったし、海軍の英雄より強い”母”が近くににいるから、その海兵にならず自由に生きられ、兄弟との約束を破らずにすむと思ったからだ。

そしてそれは地獄の入り口だった。

お袋は滅茶苦茶だった。どれだけ力を抑えていたのかを思い知った。

その1

実践訓練として組手を行った。俺達が当たらない空間が切り裂かれ崩れ落ちる。俺とルフィは初めは棒立ちでよく切り傷を負ったものだ。

その2

ルフィは悪魔の実を食ってしまったため海では溺れてしまうので別だったが俺は海に叩き込まれた。お陰で海王類は近海の主くらいなら手懐けられるくらいにはなった。ルフィは山の主を手懐けていた。

その3

海賊や山賊を刈った。この時から俺らにはおこずかいと称して金が手に入る。ボロボロになりながら倒してきた。後から気が付いたがその時の俺達より上の実力者を相手していたため着実に強くなっていたのは認識できた。お袋は、あのババアは俺ら在必死に戦ってるのを酒を呑みながら眺めていたが。

その4

これは1と重なるが組手だ。しかしこの過酷さにガープが全力で止めに入るほどだった。

一定の強さを得た俺とルフィはある日から山に放逐された。しかし村には降りれなかった。何故なら村に行くためにはお袋の結界を超える必要があったからだ。

お袋の結界。それはお袋の認識する範囲に存在する存在を切り裂く能力を認識しなくては越えられない。つまりお袋の攻撃を認識して避ける、もしくはは防御しなければいけない。そうでなければ俺達は細切れになる。

故にだ。あのガープすら止めに入るほどだった。このままでは死んでしまうと。

幸い俺達にはお袋より叩き込まれたサバイバル技術により生きていく分には問題ないが不便な事にはかわりないのは確かだった。

そこで糞爺はお袋の結界をくぐり抜け、俺達に覇気と言う術を授けた。

それが見聞色の覇気。周囲の音を、色を、存在をとあらゆる情報を把握する術。それを徹底的に叩き込んだ。

厳しくもあつたがお陰で覇気と言う特殊な力を把握出来たので少し感謝している。

ちなみに結界を抜けるとき爺は俺達を庇い全身切り傷を負っていたが周辺は更地になっていた。今なら武装色の覇気を纏っていたと気が付くが、当時は化け物爺と化け物婆としか思わなかった。

後はなんだ？とりあえずお袋の拷問に近い訓練を受けながら爺に守られながらボコボコにされた記憶ばかりだ。

まあ家に帰ると泣きながら謝られていたので俺達のためにやっていたのと理解はしたが、正直納得はしていない。それほどに過酷な修行だった。

「なんだよエース！久々のお母さんに会って感動してんのか？久々におっぱい飲む？」

「うるせえ!!お袋の乳なんざ飲んだ記憶ねえよ！お袋の乳飲んだのなんざルフイだけだよ！」

「いやん！旦那もよ！」

「黙れ色ボケ！半世紀以上生きた婆が何言ってるやがる！」

そんな反則とも言えるお袋。お袋は俺と話したら満足したのか俺と並走するのをやめて消えた。信じがたいが、海を一人用のボードで能力で動かす俺に合わせてコンマ秒で空間を切り裂いて進んでいたようだ。そして満足したので俺の速度を越えて俺の向かう先の大陸までの空間を切り裂いて移動したようだ。

「敵わねえな。親父も、お袋も」

## 6話

「よおルフイ、久しぶり。回りの奴等は仲間？」

「おっ！久しぶり！皆俺の仲間だ！皆すげーんだぞ！」

「はは！それは良いね！」

「だろ！」

「はははははは!!!」

落ち着け、落ち着くんだ私。

この海賊団は破天荒な奴等ばかりだし、その船長が一番破天荒な奴だし気にしたら負けだ。

例え突如現れた女が親しげに船長であるルフイに話しかけ、何でも無いようにルフイが応えていてもどうせ知り合いか何かだろうと思う。ルフイ以外全く気が付かないとしてもだ。

「それでここで何してんの？ここってクロコダイルの縄張りでしょ？ルフイより一応格上だよ？」

「!!!」

その言葉に私達は強く警戒をした。

船長、ルフイはのほほんとしているが、剣士のゾロは剣を構え、狙撃主のウソップは私の後ろに逃げ、船医のチョッパーは暑さでバテた。サンジ君なんかは目がハートにしなからお茶の準備をしている。ゾロ以外情けないそしてクロコダイルと言う言葉に一番反応した契約者のビビは

「くっ！クロコダイルの部下ね！死ね！」

そしてルフイにおさえつけられた。

「馬鹿！死にてえのか！」

「ルフイさん！離して下さい！クロコダイルの部下ならこの場でころさなくては！」

「死ぬのはお前だビビ！間違ったのは謝れば許してくれるから母

ちゃんに謝れ！死ぬぞ」

「「……………え？」」

聞き間違いだろうか。突如現れた黒髪の女性はルフィと親しそうに話し、ここが七武海であるビビを困らせる海賊クロコダイルを知っている、今まで見たことも無いほど顔を青ざめるルフィが母ちゃん、つまりはおやと呼ぶ人物。

それが目の前にいる。

「あ、私ルフィの母親ね！よろしく！たまたま近くまで来たから会いにきたぞー！」

「母ちゃん！俺も強くなったから心配すんなよ！」

「親はいつまでも子供のことは心配なのさ」

「そうなのか？」

「そうなんだよ。あ、さつきエースにあつたからそのうちくるぞー！」

「マジか！ん、本当にエースの気配が、」

おい母ちゃん。エース多分寝てるぞ？町の真ん中辺りだから店で食いながら寝てんじゃない？」

「多分じゃなくて間違いなく寝てるね。もうちよい鍛えな」

何か凄く異次元な会話が聞こえる。何故町中のピンポイントで知り合いの状況が把握出来るのか。

思えばルフィと出会った時からそうだ。

何かあれば直ぐに反応していたし、町中ではぐれても直ぐに合流してきた。本人いわく感覚で分かるらしいがルフィの教え方が下手すぎて誰も理解出来ていなかったけどこのルフィの母親を名乗る女性と同じ力を持っているらしい。

「あの一すみません！」

「ん？なんだい？みかんっぽいお嬢ちゃん」

みかんっぽいって……………

何か釈然としない呼ばれかたをしたが気にしないでおこう。それよりはルフィの謎能力を知るチャンスだ。あわよくば手に入れば色々役立つかもしれない。

「その、ルフィや貴女のつかってる気配を把握するのはなんなんですか？」

この質問にはゾロは勿論、他のメンバーも反応していた。やはり気になっていたのである。

「なんだよルフィ。教えてないの？」

「教えたぞ？わかんないみてえだけど」

「何ていった？」

「勘！」

「……………他には？」

「言ってねえ！」

「わかるかアホ……………!!」

「ギャ……………!!?いであ……………!!」

そうなのだ。ルフィは私達に対して勘としか言わなかった。分かるわけない。だから私達は先天的な能力として認識して諦めていたがそれでも無いらしい。

と言うか

「おい色ボケコック」

「なんだクソマリモヘツド」

「何かルフィ殴られて痛がってねえか？」

「ああ痛がってやがるな。ゴム人間なのに」

そう。あのルフィが打撃で痛がっている。ゴム人間なのに。衝撃を吸収してしまう程に弾力に溢れた体なのに痛みを感じている。

そう言えば、ルフィも時々不思議な事をしていた。腕が少し黒くなったと思えば剣を腕で受け止めたり出来ていた。それと関係することなのだろう。

「さて、皆さん。うちの馬鹿息子が大変馬鹿で申し訳ない。馬鹿で」

「……………本当に……………」

「おい母ちゃん！俺の何が馬鹿なんだよ！それもえーと……………1

……………2……………3回も言いやがって！」

「……………そー言う所だよ馬鹿!!……………」

全員の声がそろそろ。それほどにルフィの馬鹿さ加減は半端ないほ

ど馬鹿な馬鹿野郎だ。

「てやつー！」

「ぐぺっ!?!」

ギャーギャーうるさかったルフィはある意味謎な女性により気絶させられた。

……あのルフィを一撃で気絶させるとは恐ろしい。私が知るなかで恐怖の象徴だったアーロンを一瞬で倒したルフィは、正直、認めたくは無いが世界で一番たよれる船長だった。今でもその気持ちに変わりはないけど、それでもルフィより強い人に会った事がなかったため恐れは抱いてしまう。

「…………おい女。確かにうるさかったがこれでも俺らの船長なんだ。一味の長に手を出したらどうなるか……………わかってるか?」

「うーん。まあわかるよ?メンツつてのがあるもんね。クソ下らない子供の矜持ってやつ?弱い奴ほど気にすんだよなー、生きる事より優先する誇り?ってやつ。つーか女って何さ。一応これでもあんたらより数十倍は強い雑魚船長の師匠なんだけど?身の程わきましろよ糞餓鬼が。まだそこで気絶してる鼻長君や可愛い謎生物の方が可愛らしい。自然の摂理を分かってる」

今気がついた。私の体は小刻みに震えている。まるで巨大な蛇に睨まれたかの様に、巨大な捕食者に生殺与奪を捕まれた弱者の様に。ギリギリ意識を保っていたがかなり限界だ。ゾロやサンジ君も冷や汗を流していて、ビビは涙を浮かべ震えている。きつと私も同じだろう。

凄まじいまでの威圧感。なんだこの感覚は。わからない。わからないけど怖い。

「まつ、合格だね!」

ふと恐怖の重圧がなくなった。

「君達いいね。皆が皆、違う力がある。私的にはそのみかんっぽいお嬢ちゃんとビビ様は良い!うちの子の嫁にこない?後長鼻君は



狙撃主としては良いね！恐怖を恐怖と認識出来るのは才能の1つだ！その珍生物はペットに欲しいな！後は戦闘要員かな？良いよ、本当に良いよ！私の覇氣を受けて冷や汗だけですんでる。才能あるね！」

何故か女性は上機嫌で語り初めた。

「あ、今答え言ったからね？覇氣だよ覇氣。人間誰しも持つてる潜在的な能力。悪魔の実を食っていない人間でも等しく身に付けられる、そして能力者にも等しく対応出来る人間のもつ神秘の力。それが覇氣だ。今君達は恐れたよね？それは霸王色の覇氣。これは才能によるけど数限りない程の中一部の王の器しか発現しない力で簡単に言うとは他者を圧倒する力。今君達が味わった力だ。私が未熟とは言え耐えた君達には才能あるよ」

覇氣。初めて聞く言葉だ。だけど聞く限り誰もが身に付けられる力らしい。彼女の言う霸王色の覇氣は難しいかもしれないけど他は別のようなだ。

「まあ少し修行すれば皆使えるのは武装色の覇氣と見聞色の覇氣だね。鍊度にもよるけどどちらも習得事態は難しくないね。一人ずつ鍛えてあげたいけど………んー、息子の仲間に手を加えるのはちよつと違うかな？」

皆頑張つて！」

「ちよつ!?なげやりすぎませんか!」

思わず叫ぶ。ルフィの勘つて言うのも大概だがこの人の説明も適当に聞こえた。

「んー、と言つても本来なら数年かけて覚える技術だからねえ。まあ参考までにこの技術を修めればだけど人の心も読める。みかん少女は泥棒だね？でも海に、航海に夢をもつてる。航海士だよね」

「っ!」

初見で私の在り方や生きてきた歴史を読まれた気分だった。まるで本を、私が書いた日記を読まれて、その上で後書きをなぞったような感想。それは当たっていた。

初見で見破られた。私の在り方を。

「コレが見聞色の覇気。ルフィはまだ未熟だから周囲の気配捕らえる程度しか出来ないけど極めれば一人の在り方さえ把握できる。これは怖がりほど極地に達する。ビビりだから周囲に敏感だからね！」

「恐れを抱きながらも聞き入ってしまう。」

「次に武装色の覇気。これは単純に武力の強化。見たことないかい？ルフィの体が黒っぽくなったのを？あれは単純に体を強くしながら、相手の本質にダメージを与えることができる。だから私はルフィに痛みを与える拳骨が出来たわけだ」

「ようやくわかった！ルフィはその覇気がある程度使えたから今までの不思議な力を使えた！そしてその正体は覇気と言う人間なら誰でも使える可能性がある力！これがあれば私達は！」

「それで！その使い方は？！教えなさいよ！！」

「え？良いけどヤダ！」

「！！どっちだよ！！！！」

総ツツコミ。皆の気持ちが一つになった。気絶してる連中すら片手を上げていた。流石にその答えは予想していない。イエスでもノーでもないとか訳がわからない。ルフィの親らしいとも言える。

「いやー、気持ちいいツツコミありがとう！ボケたかがあるね！」

「！！「ボケかよ！！！！」」

「んっ！なんだろう。ちよつと気持ちいいねこの感覚。半世紀生きてきたけど初めてかも」

「以外とババア！！」

「殺すぞ緑坊主！」

「！！」

ゾロが怯えている。と言うより皆が怯えていた。気絶してるウソップは何故か震えていてチョップパーは仰向けで服従のポーズをとっていた。いての間にかルフィは目を覚ましていて麦わら帽子を抱きながら警戒をしていた。今まで何が合ったのかは知らないがこんなルフィは初めてだ。

「……………おいルフィ」

「ひ、ひゃい!!」

・ルフィがひゃい。笑いを堪えるのが少し辛い。ビビも涙目だ。

「てめえ、女性の取り扱いには散々たたきこんだよな?」

「お、俺は何も言ってるねえ!ゾロが勝手に!」

「おいルフィてめえ!」

「だまれごらあ!船員の責任は船長の責任だ!そう言わなかったか!私!お前に!」

「いっ!」

「ぐはっ!」

……………凄い。あの戦闘凶とも言えるルフィとゾロがなす続べなくボコボコにされていく。しかし自業自得だ。女ならババアと言われて怒らないのは本当に悟りきった老婆位だろう。私から見ても少し年上位にしか見えない女性が、例え半世紀以上生きていてもババアと言われて怒らない訳がない。私なら殺す。

しばらくするとルフィとゾロは顔の原型がわからないほどにボコボコに腫れ上がり正座をしていた。何故かチョッパーは女性の腕に抱かれ気持ち良さそうに撫でられ、サンジ君が女王に使える騎士、と言うより執事の様子にお茶汲みをし、ウソップは土下座している。なんだこれ?

「まあ大分脱線したけど覇気って力でグランドラインの先に進めば割と誰もが使う力だから覚えておきなね!つか使えなきやそのうち死ぬよ?」

誰が船長なのかわからない構図で女王は言う。

「あの、覇気って言うのが重要なのはわかりましたけど使い方がわからないです」

「まあルフィが勘って言うのも間違いないんだけど、正確には認識することが大切だね。皆感じた事ない?殺気やら気配やらを。それを極限まで突き詰めたのが覇気って力で人間の潜在的な力なんだよ」

「……………ぞれば、剣気もが？」

ゾロが濁つていながらも言葉を返す。あれだけ腫れてれば仕方ないか。

「うん。君はマナーがなっていないが才能はあるよ。その意識を日常にも広げ何気無い動作にも感じ取れる様になればその先に見聞色の覇気がある。精進しな」

覇気。数種類あるがあくまでも人間に備わる可能性の極地。極めれば戦闘にも役立ち、私のような戦闘が苦手な人間でも役に立つ能力。ヒントは得た。要は認識して、その範囲を広げる。これはある意味私達の最重要課題だ。これを少しでも身に付ければ今後の戦力に影響するからだ。

「ところでルフィ」

「ん？なんだ？」

「これはお前の喧嘩だろ？助けはいる？」

「いらねえ！母ちゃんに助けられてたらいつまでもたっても海賊王になれねえしな！ししし」

この人の力を借りればこの戦いはスムーズに終わるかもしれない。もしかしたらあつという間に、圧倒的に。ビビの事を思えば力を借りるのが正しいだろう。だけど

「これは俺達の喧嘩だ!!!」

そう、これは私達の喧嘩だ。私達でやらなければならぬことなのだから!!

後に私は色々と後悔する。助けを求めれば良かったと。戦闘脳の

船長やクルーに感化され過ぎ熱くなりすぎたと。

ちなみにルフィのお兄さんはかなり常識人に見えました。まる

## 第7話

気がついたらクロコダイルがルフィに負けてた。まる。

「つーわけだよ！シャンクス！あははははは!!」

「なっ！言っただろてめえら！アイツは絶対来るって！」

「おいおいお頭！俺らはルフィが餓鬼の頃から知ってたの！うちの船にいたらもつとスゲエ奴に」

「よしその幹部でもねえ奴。私の修行に付き合ってみるか？殺すぞ」

「え？ちよ!?!まって！宴の席でしょ？ルフィの修行って言ったって………え？マジで？」

「あくあ、馬鹿だなあいつ。ルフィがどんだけヤバイ修行してたのかわらねえのか」

「仕方ねえよ。あいつはまだ新人だったからな」

「おいお頭！せっかくだし赤髪海賊団総出で姉御に鍛えて貰うか？ギヤハハハハ！」

「おいおいてめえら。せっかく嬉しいニュースがきたのに自殺志願者か？それとも勇者か？今連れ去られた奴、明日には幹部クラスの強者になってんぞ？まあともかく目出度い席だ！ルフィが七武海を倒した！まだ航海初めたばかりのルーキーがだ！この先、荒れるぞ!!」

騒がしい。実に楽しい。何せ息子が七武海の一部を崩したのだから。これは騒がずにはいられないだろう。

私の修行に文句？をつけたシャンクスの団員は端正込めて仕込ん

でやった。死にかけていたがあいつの団員だし大丈夫だろう。きつと近いうちに幹部補佐くらいはなれる位には仕込んだ。

「ん？お前姐さんの拷問に耐えたのか？おっし！今日からお前には部隊をつけてやる！精進しろよ！」

「……………お、おっす」

「よかったな！私のおかげであんたは大分昇進したぞ！なんだっけ名前？ロブスター？」

「エビスターっすよ！せめてボコった奴の名前位覚えてくださいよ！？」

「ごめん。興味ない」

「腐れ婆!!」

「死ね！私はまだ55だ!!」

「充分バ、ギヤあああ!!?!」

笑いが響く。私だってそうだ。

楽しいのだ。息子の事もそうだが、気の知れた奴等とのたわいも面白い取りが面白い。

昔を思い出す。兄がいて、仲間たちがいた若かった日々を。

毎日の様に騒ぎ、毎日の様に暴れ、

仲間が増えて、また楽しくなってきた。

そして最果てを見て

「シャンクス。あの子にお前腕の価値は証明されたら？」

「はっ！俺のダチなんだぜ？腕くらいくれてやるっての！」

次の世代に残せるものがあった。

「本当においしい男だよ。あんた、海賊でなければ好き勝手出来ただろうっ！」

「おい姐さん！お頭がちがかったら俺らはどうなんだよ!？」

「え？私のお小遣いじゃない？」

「あ、これマジだ。俺あらためてお頭の船にのつてて良かった！」  
また笑いが響く。ギヤハハと品の無い人が心から上げる声。

楽しいのだ。たわいない事がとても。誰に縛られず地位も関係なく、強弱の存在がある中でも仲間として迎えて貰える。皆が皆酒場の友人としてじゃれ合う環境が楽しくて仕方ない。少し間違えれば敵対するのにも関わらず、赤髪海賊団は私を姐として慕ってくれている。

「おいシャンクス」

「ん？なんだよ」

「お前、子供いつ産ませるんだ？あとミホーク、おめえもだ」

だからだろう。子供の様に可愛がっているシャンクスやライバルのミホークに目をつけてしまう。

ジュラキユール・ミホーク。世界1の剣豪と呼ばれる男であり、王下七武海のひとりであり、四皇のひとりである者、赤髪海賊団のシャンクスの友人でありライバルだ。

その実力は剣士としては最高峰。悪魔の実を食していないながら、たった一人の剣士としての実力で七武海に選ばれた猛者でもある。

「姐さん、ミホークは……………」

「俺は貴殿の斬激を越えぬ限り頂点にはたてぬ。越えた先に己が物を託す子をなすとしよう。許されれば貴殿に我が子をなしてほしいが」

「はははは！私との子供が欲しければ旦那様より魅力的になつてみな！具体的には旦那をころしてみろよ！私が殺してやる！死ぬよオラア!!」

「……………ああ姐さんとヤロウガ切り合い初めた。姐さんガチだし、ミホークは楽しそうだし止めるのだけいいな。とりあえず飲むか!!」

その後気がついたら赤髪海賊団の根城の島が地形を変えていた。生意気な事にミホークの奴は切り傷や掠り傷はあっても致命傷はほぼ無し。本気で焦ったシャンクスが止めに入るまで嬉々として私と



やり合っていた。

「くそう。これだから天才とか嫌いなんだよ！ミホークてめえ！そろそろカイドウあたり仕留めてこいよ！後無駄子作りババアのリンとか！」

「ふん。個人的には負けるつもりはないが奴等の組織力は厄介だ。断る！」

「ぎけんな！幹部を1日1殺すれば何れ殺れんだろ！殺れよ!?つーかりンリンとでも子作りすればそれなりに強い子が生まれんだろ！そつちとやつとけ！わたしやあ旦那一筋だ！」

「断固として断る！あんな巨漢婆抱けるか！どんな拷問だ!？」

「てめえ！あんな糞みてえで我儘で大喰らいで無駄に大きくて魔女みてえな婆だけど一応女だぞ!?そんな女を抱くのが拷問だど!?口を慎め！あいつの子供を作った旦那達に謝れ！そいつらは正に勇者であるのに、奴等を侮辱する気か!!あんな醜女に子作りさせさせた勇者達に謝れ！きやはははははははは!!」

『あんたが謝れよ!』

私を除く全てからツツコミを受ける。うむ、解せぬ。事実なのに。しかしそれでも周囲から笑顔は消えない。

皆がギャハギャハと下品に笑い私とミホークの殴りあいを見て、そしてそれを止めようと焦るシャンクスを見ている。

皆楽しいのだ。

粗暴で下品で野蛮で、そして楽しい海賊らしい自由なやりとり。

皆が皆強者であるからこそ認められる、そして仲間でなく、時に敵対しながらも友として認めあつたからこそ分かる絆。

「ちよーまつ!?!俺の黒刀、あ!?!俺、は今、す、で!?!」

「オラオラオラオラ!ご自慢の黒刀はどーこーかなーつと!ハンデで能力使ってあげないけどガンバ!これで私に勝てればガープにも勝てるよ!やったね!」

「……………やめてやってよ姐さん。こんなミホーク見たくねえよ……………」

海賊とは自由だ!

後日私は全力でミホークに謝った。